
夜会

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜会

【Nコード】

N1407Y

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ナポレオンが倒れウィーンに集る各国の外交官達。華やかな舞台の中で様々な思惑が交差する。あの会議は踊る、のお話を書かせてもらいました。

第一章

夜会

今夜は。宴だった。

宴であるから様々な人間が集っていた。このウィーンは元々そうした街であるが今はとりわけだ。様々な国から様々な人間が集っていた。

ナポレオンが倒れ列国の者達が着飾りそのうえで集っている。そうして宴を楽しんでいた。

その中でだ。宴の御馳走を食べてだ。ロシアの者達が言う。

「これはいいな」

「そうだな」

こう話していくのだった。

「これがウィーンの料理か」

「本当の宮廷料理なのか」

「いやいや、違いますぞ」

ここだ。フランスから来た男がロシアの者達に話す。

「これは真の宮廷料理ではありませんぞ」

「違うのですか」

「はい、やはり我が国です」

フランスだ。自分の国がだというのだ。

「我が国のものがです」

「真の宮廷料理だと」

「そう仰いますか」

「我が国の宮廷料理はそれこそです」

傲慢からだ。まさにそうした話だった。

「あのカトリーヌⅡドメヂイチにはじまりです」

「ああ、あの王妃ですか」

「イタリアから来たという」

あのサン＝バルテルミーの虐殺を引き起こした王妃だ。お世辞にも評判のいい人物ではないがロシアの面々はそのことは隠して応える。

「あの王妃からですか」

「はじまったのですか」

「そう、そしてルイ十四世の頃に完成され」

フランスの男は胸を張って誇らしげに話していく。

「今に至るのです」

「ではその宮廷料理と比べればですか」

「このウィーンの宮廷料理は落ちる」

「そう仰るのですね」

「料理だけではありませんぞ」

言いながらテリーヌを食べる。子鴨のテリーヌをだ。

そのうえで次はワインを飲む。その話すことは。

「ワインにしろです」

「ワインですか」

「このワインも」

「我が国はワインの宝庫です」

実際にフランス各地でワインを生産している。名産となっているワインが実に多い。

「我が国にワインで勝る国はありません」

「ではそのワインをです」

ロシアの者のうちの一人がこうフランスの男に言った。

「一度飲んでみたいですが」

「はい、それではです」

その言葉を待っていたかの様にだ。フランスの男は応えた。

「今宵私の部屋に来て頂ければです」

「そのフランスのワインを御馳走して頂けるのですね」

「そうすればおわかりになります」

「フランスワインの素晴らしさを」

「そうです。ですから」

それでだとか。彼はロシアの面々を誘っていく。

「いらして下さい」

「わかりました。それでは」

「宜しく御願います」

ロシアの面々はフランスの男の言葉に頷いた。そうしてだ。

自慢話が出来たフランスの男は意気揚々と美人達の中に向かう。

その後姿を見送ってからだ。

ロシアの者達はだ。ひそひそとこうした話をするのだった。

「これでいいな」

「ああ、フランスの話を聞ける」

「今回の騒ぎの当事国だがどうするか」

「それがわかるな」

こうだ。華やかな夜会の中で囁き合う。その声は舞踏会の宴と艶やかな笑顔、それに美しい音楽の中に隠れていた。その中での囁きだった。

「堂々と一連の騒乱は革命のせい、ナポレオンのせいになっているが」

「それで乗り切るのか」

「果たしてそれが可能だと思っているのか」

「それを見られるな」

こう話すのだった。そしてだ。

その宴の中でだ。別の者達がいた。彼等は。

オランダ人達がいた。彼等はかなり焦燥している顔でだ。イギリ

スの者達と話していた。

第二章

「では支持して頂けるのですね」

「我々のことを」

「そのことを約束して下さいそうですね」

「はい」

その通りだとだ。イギリス側の一人が答える。彼等は宴の隅ではなく中央に近い場所で立って話をしている。しかしその彼等を見る者はいない。

丁度宴の華やかさがそれを隠している形だった。その中で話をしているのだ。

その中でだ。イギリス側はこうオランダ側に話した。

「我々は貴国の復活を支持します」

「最早ナポレオンはいなくなりました」

「それならばです」

「是非。フランスの支配から脱して下さい」

「有り難うございます」

オランダ側はイギリス側の言葉を受けてだ。まずは安堵した。そしてそのうえでだ。彼等に対してこうしたことを話すのだった。

「では我々はです」

「貴国に対して御礼を差し上げますので」

「好意として受け取って下さい」

「いえ、それはいいです」

ところがだ。イギリス側はこうオランダ側に言うのであった。

「我々は貴国に申し訳なく思っていますので」

「申し訳なく」

「申し訳なくですか」

「はい、そうです」

「そう思っていますから」

それでだというのだ。

「ですから。御好意やそうしたものはです」

「いりませんので」

「いえ、そうはいきません」

「それは失礼にあたります」

オランダ側は必死の顔になってそれはどうかと返すのだった。

「貴国が動いてくれたからこそ今我々はここにいられますから」

「ですからです」

「何とか受け取って下さい」

こうだ。何とかという顔で言うのだ。

「是非です」

「そうして下さい」

「そこまで仰るのですか」

イギリス側は真面目な顔になってだ。そうして彼等に応えた。

「ううむ、そこまで仰るのならです」

「我々としても断る訳にはいきませんね」

「そうですね」

「では。是非です」

「受け取って下さい」

「そうして下さい」

「わかりました」

イギリス側は応えた。こうして彼等の話はおおよそのことが決まった。そのうえでお互いに笑顔になって別れた。その後である。

イギリス側はだ。宴の中を歩きながらこう話すのだった。

「これでいいですな」

「はい、オランダ側かわ見返りを得られます」

「我々としても狙い通りですね」

「まあ当然のことですが」

こうした言葉も出た。オランダ側に話したこととは明らかに内容が違っていた。しかしそれを当然としてだ。彼等は話をしていた。

「血を流したのは我々ですから」

「彼等は敗れてフランスに併合されました」

「しかし我々が勝ち彼等は復活できましたから」

「それならばです」

見返りもだ。当然だというのだ。これが彼等の本音だった。

そしてだ。オランダ側もだ。こう話をしていた。

彼等だけになった場所だ。イギリス側との話について彼等だけで話をしていた。

「これでよしですな」

「見返りはまあ。ある程度で済ませて」

「イギリスは只でさえ栄えているのですから」

「ですから。ある程度でいいでしょう」

「そうですね」

彼等も彼等でこう考えているのだった。しかしそれは面と向かっては言わないのだった。

その他にもだった。バイエルンとザクセンの関係者もそれぞれ会っていた。

「それではです」

「そういうことで」

お互いにだ。表情はにこやかにやり取りをしている。

「共にです」

「協力していきましょう」

笑顔で協力を約束する。そうしてだった。

第三章

彼等はだ。お互いにある国の名前を出したのだった。

「このままですとオーストリアとプロイセンの独壇場ですからな」

「全く。神聖ローマ帝国はもうなくなったというのに」

「彼等はまだ力を欲していますな」

「ドイツの地に」

それはこの時代では只の地理的な概念でしかない。政治的には無数の国に分かれている。三十年戦争によりそれが決定的なものになったのだ。

バイエルンもザクセンもその中にいる。その彼等が今こうして話しているのだ。

「我等としてはこのままいきたいですな」

「その通りです。国家の主権は守らなければなりませんから」

「折角あの小男が置いていってくれたのです」

その小男とは誰か。彼等の間では言うまでもなかった。

「それならばですな」

「その置き土産を守っていききたいものです」

「我等の主権」

神聖ローマ帝国消滅以前よりさらに確かなそれをだというのだ。

「オーストリアにもプロイセンにも害させません」

「何があっても」

こう話していたのだった。その少し離れたところでは。

スペインの者達だ。ほっとした顔でいてだ。先程とは別のイギリスの外交官達、フランスの者達も交えてだ。こんなことを言っていた。

「長かったです」

「長かったですか」

「はい、まことに」

こうだ。スペインの彼等は安堵した顔でイギリスとフランス、双方の外交官達に言うのである。

「あの小男が攻めてきてです」

「そうですね。あの成り上がり者」

「風呂と香水ばかり好きなあの男が」

「そうして我が国を滅茶苦茶にしてくれました」

ナポレオンはフランス軍を攻め込ませスペイン王家を追いつしそのかわりに己の兄をスペイン王にしたのだ。彼等が言うのはこのことだった。

「しかもです」

「その後の戦争ですね」

「スペインにおける」

「多くの血が流れました」

そうだったとだ。スペイン側は忌々しげに言うのだった。

「フランス軍によってどれだけの血が流されたか」

「少し待って下さい」

スペイン側がフランスの名前を忌々しげに出したところでだ。フランス側がすぐに出て来てだ。そうして彼等にこう言うのだった。

「それは違います」

「違うとは」

「あれはあの男がしたことです」

ナポレオンが悪いというのだ。

「あの男がしたことです。フランスではありません」

「そう仰るのですか」

「そうです。あの男はそもそもです」

そのナポレオンはだ。どうかというのだ。

「フランス人ではありません」

「コルシカの小男だということです」

「はい、その男がしたこと」

こうだ。しれっとして言うのだった。

「間違っても我々ではありません」

「しかしです」

スペイン側は彼等のその主張にむっとした顔になってだ。そのう
えで言い返すのだった。

「兵も将軍もフランス人だったではないですか」

「確かにその通りです」

「では貴方達がやったのではないですか」

スペイン側にすれば責任逃れにしか聞こえない。それで抗議する
様に言うのである。しかしだ。

フランス側はそう言われてもだ。やはりしれっとした顔で返すの
だった。

「そうではないのですか」

「私達は無理強いされたのです」

「あの男にですか」

「そうです。あの男が決めて主導していたのです」

「我が国のことを」

「貴国のことだけではありません」

そのだ。スペインだけではないというのだ。

「他のあらゆることもです。我々はあの稀代のペテン師に乗せられ
騙されそして挙句には無理強いされていたのです」

「では貴方達は」

「はい、被害者です」

見方によってはだ。臆面もなく言うのだった。

第四章

「紛れもなくです。あの男の被害者なのです」

「そうだということですか」

「我々がどれだけ血を流すことを強いられたか」

フランス側はあくまでこう主張する。

「それを考えればです」

「被害者ですか」

「はい、そうです」

「では全ては」

「あの男が悪いのです」

これがフランスがナポレオンに任せる最後の仕事だった。彼に全責任を押し付けてだ。そのうえで人身御供にしようというのだ。

彼等はそれをフランスの為にあってすることに決めたのだった。

そしてだ。さらにだった。フランス側はこう言うのだった。

「我等は一つ素晴らしいことをしています」

「素晴らしいこととは」

「それは一体」

「そのナポレオンを追い出したのです」

そうしたというのだ。

「あの男をエルバ島に追い出したではありませんか」

「ではナポレオンを倒したのは」

「我々です」

フランス側は胸を張って主張する。

「素晴らしいことではないでしょうか」

「そう考えられるのですか？」

ここで言ったのはイギリス側だ。これまで黙っていた彼等はここ
でようやく口を開いた。そうしてそのうえでフランス側に言うのだ
った。

「貴国は」

「そうですか」

「我々はトラファルガーで勝ちスペインを助けてきましたが」
彼等は彼等で自分の功績を話すのだった。

「それは」

「いや、しかしです」

「しかしとは？」

「そのせいでスペインは泥沼になりましたね」
こうイギリス側に言うのである。

「そうでしたね」

「我が国がスペインの民衆を助けたことがですか」

「それがナポレオンを過激に走らせました」

ゲリラに対して虐殺で挑んだのだ。それにより多くの血が流れた。
スペイン内戦は実に多くの血が流れた酸鼻な戦いだったのだ。

そのことをだ。フランス側はイギリス側に言うのだった。

「ああしなければです」

「いや、ああしなければスペインはです」

イギリス側も己の意見を主張する。

「貴国に敗れていたでしょう」

「我が国といえますか」

「はい」

はつきりとだ。皮肉を言ってみせたのである。ナポレオンではないとだ。

「ですからああしたのです」

「ナポレオンですか」

フランス側も負けてはいない。平然として返す。

「あの男にですね」

「ううむ、そう仰いますか」

「ナポレオンだと」

「陛下が戻られました」

フランス側は王政復古をその主張の根拠にしてきた。

「ですから」

「だからナポレオンですか」

「あの男がしたことですか」

「我々も酷い目に遭いました」

自分達は被害者だというのだ。ナポレオンの。

「ですからその彼のせいです」

「ではそのナポレオンをですか」

「エルバ島に流しましたからこそ」

「いや、あの男もこれで終わりです」

フランス側はにこにことして話す。

「島流しですから。それで、です」

「それで？」

「それでといいますと」

「ナポレオンに止めをさしたのは我々です」

今度はこう言うのだった。

第五章

「その功績の褒賞ですが」

「褒賞!？」

「褒賞と仰いますか」

これにはだ。イギリス側もスペイン側も啞然となった。ナポレオンに責任を押し付けるだけでなくだ。彼の追放を功績としてだ。褒賞を要求してきたからだ。

どちらも内心呆れ果てた。しかしフランス側は平然としたまま言ってきた。

「ではそれについてのお話をしましょう」

「領土や權益が保全されていますが」

「それでもですか」

「それに加えてさらに欲しい」

「それは。かなり」

「当然ではないのですか？」

フランス側は臆面もなく主張する。

「ナポレオンを追い出したのですから」

「左様ですか」

「そう仰いますか」

「はい、ではそのお話を」

両国が呆れ返る中でだ。フランス側は言っていく。彼等はこんな有様だった。

これまた同じ舞踏会の場でだ。ナポリの者達とオーストリアの者達がグラスを打ち合わせ乾杯をしてワインを飲みだ。それから話すことは。

「あの男はエルバ島に流されました」

「これでイタリヤは安全ですね」

「はい、それではです」

「イタリアは元に戻り」

イタリア南部を治めるナポリの者達とイタリア北部を勢力圏に持っているオーストリアの者達がそれぞれ笑顔で話している。実はだ。彼等はどちらも君主はハプスブルク家である。ナポリ王の王妃はオーストリアの皇后であり実質的な君主であったマリア・テレジアの娘なのだ。

その縁で彼等は親しいのだ。その彼等が話すことは。

「以前のままで」

「平和にやっけていきましょう」

「どうなるかと思っていました」

ナポリ側がだ。こんなことも言った。

「あの男の息がかかった者が来た時は」

「ミュラーですね」

「はい、馬に乗る以外に能のない男でした」

ナポレオンの下で騎兵隊を率い活躍した男だ。国王としては資質に欠けナポレオンを散々苦しめ悩ませる結果となっていたのだ。

その彼についてだ。どちらも話すのだった。

「しかしあの男はいなくなりました」

「そうして元の方々が戻られ」

そのだ。ハプスブルク家の縁者がだ。

「我が国は元に戻りました」

「そして我等もです」

オーストリア側もだ。満面の笑みで話す。

「あの男に奪われたものを取り戻しました」

「では。これからまた」

「はい、南はそちらで」

「北は貴国に御願います」

こうだ。彼等はイタリアにおけるそれぞれの勢力圏を定めたのである。南の半島はそうになっていた。そして北の半島はというと。

プロイセンの者達がスウェーデンの者達に尋ねていた。やはり同

じ場だ。華やかな中でだ。ここもまた何か剣呑なものがある。

その剣呑な中でだ。プロイセン側は問うのだった。

「では貴国はナポレオンとは」

「一切関係がありません」

スウェーデン側はフランスと同じ主張をしていた。

「何の関係もありません」

「そうなのですか」

「確かに今の陛下はあの男の下にいました」

ベルナドットだ。ナポレオンの將軍の一人だ。彼はナポレオンの命でスウェーデン国王になった。フランスのスウェーデン併合の布石だった。

しかし彼はフランスの為でなくスウェーデンの為に動きだ。やはりナポレオンを見捨てた。そして今彼等をこのウィーンに送っているのだ。

第六章

その送られた彼等はだ。こう主張するのだった。

「しかし紛れもなくスウェーデンの国王陛下です」

「陛下ですか」

「そう仰りますか」

「そうです。それでなのですが」

「宜しいでしょうか」

ここでスウェーデン側はプロイセン側に怪訝な顔になって話してきた。

「ノルウェーのことですが」

「あの国のことですが」

「ああ、あの国のことですか」

「別に構いません」

返答はこうしたものだった。

「どうぞ。何なりとです」

「好きにされて下さい」

スウェーデン王は隣国ノルウェーの併合を考えている。そのことについてだ。

近隣にあるプロイセンの確約を取り付けたいのだ。そしてプロイセン側もだ。

彼等は彼等でだ。こう話すのだった。

「スウェーデンとノルウェーが一つになれば」

「デンマークにも圧力をかけられますね」

「そして北ドイツの諸都市や国家にも」

「圧力が及びます」

さすればというのだ。彼等にとってだ。

「その分我等を警戒する目が向かいますし」

「それにスウェーデンに対する為に我等を頼りにするでしょう」

「だとすればここは」

「支持すべきですな」

「左様ですね」

こう話してだった。彼等は彼等の方針を決めたのだった。

そのうえでスウェーデン側に向き直りだ。笑顔で応えた。

「是非そうして下さい」

「御望みの通りに」

別にいいというものからさらに踏み込んだ言葉になっていた。

「貴国もナポレオン追放に功績がありましたし」

「是非共」

「わかりました。それでは」

「そうさせてもらいます」

こうしてだ。スウェーデンはノルウェーを手に入れることを確かなものとしたのだった。南は南で、北は北でこうした感じになっていた。

ウィーンでは各国がそんな調子だった。そう、各国がだ。

その為会議は進まずだ。何か冗長な雰囲気さえ漂いだしていた。

しかしオーストリア、そのウィーンを首都に持つ国の宰相であるメッテルニヒはだ。その冗長な雰囲気は満足して側近達に話すのだった。

「これでいいのだ」

「今の状況で、ですか」

「宜しいのですね」

「そうだ。こうして会議を踊らせ」

そしてだというのだ。

「各国に喋ってもらいだ」

「我々はそのお喋りを聞き」

「情報を整理してですね」

「それを元に話をまとめていく」

これがメッテルニヒの狙いだった。彼はオーストリアを欧州のバ

ランサー、即ち調停者にしようとしていたのだ。

「そうしていくぞ」

「はい、それでは」

「そうして行ってですね」

「ナポレオンには負けて多くのものを失った」

その中には神聖ローマ帝国皇帝という地位もあった。最早形骸化していてもハプスブルク家にとってはかけがえのないものだった。

その他にも多くのものを失った。しかしだった。

メッテルニヒはそれをなのだった。この会議で取り戻しそのうえでなのだった。

「逆に多くのものを得なければな」

「その為にもですね」

「この会議から我々は欧州のランサーになり」

「そのうえで多くのものを得て」

「そうですね」

「その通りだ。このまま踊ってもらおう」
会議においてだ。

「そして色々話してもらおう」

「その話したことを聞きそのうえで」

「我々は動く」

「そうしていきましょう」

こんな話をしてだ。オーストリアは舞台を提供している国の旨味を思う存分活用しようとしていて実際にそうしていたのだった。

とにかく各国が各国であれこれと動き話してだ。華やかな舞台の中で踊っていた。会議は踊りだ。中々進まない状況だった。

だがそれはだ。急に終わったのだった。

彼等にとって、いや欧州全土にとってまさに寝耳の水の事態が起ったのだ。それは。

「な、何っ!？」

「ナポレオンがエルバ島を脱出して!？」

「フランスに向かっていているだと」

「まさか」

誰もが信じなかった。しかしだ。

それは事実だった。ナポレオンは実際にフランスに向かっていて、それを確めてだ。

ウィーンは騒然となった。舞踏会の場に爆弾が投げ込まれた。

「そんな、それではだ」

「我が国はどうなるのだ!？」

「我が国も」

「あの男が戻って来たら」

「嵐が起こるぞ」

ナポレオンはまさに風雲児であった。その彼が戻って来るとわかってだ。

誰もがだ。どうすべきか焦ってだ。そしてだった。

「ここはどうされますか!？」

「このままではあの男がフランスに戻ります」

「また皇帝になります」

「そうなれば」

「また同じではないですか」

その通りだった。ナポレオンを放置することは絶対にできなかった。それでだ。

彼等はだ。ここはだった。

とりあえず話を半ば強引にまとめてだ。それからだった。

それぞれの国に慌しく戻り。ナポレオンに備えることにした。その中で誰もいなくなったウィーンでだ。メッテルニヒは言うのだった。

「では我が国もだ」

「はい、ナポレオンに対してですね」

「備えますか」

「あの男を何とかしなければどうにもならない」

オーストリアにとってもだ。ナポレオンは忌むべき相手だ。それならばだった。

すぐに何とかしなければならぬ。具体的には軍を動員することだった。

「全軍を挙げてだ」

「そしてそのうえで」

「今度こそあの男の息を止めましょう」

「そうするぞ。絶対にだ」

こうしてだ。ウィーン会議は中断されてだ。後に残ったのは。

様々なものが散乱したままの宴の場だった。食べ残しもあれば汚れたテーブルかけに火が消えたキャンドル、それにソースが拭かれていない皿やまだワインが残っているグラス、そういうものばかりが残された。オーストリア側もそれを放っておいてだ。ナポレオンに備える方に忙しくなった。

そんな中でだ。フランスに戻るタレーランはこう言うのだった。

「百日だな」

「百日!？」

「百日ですか」

「それだけの時間でまた元に戻る」

帰りの馬車の中で悠然とだ。周りの者に話すのである。

「その時を待とう」

「百日でナポレオンのフランスに戻る」

「そうなるというのですか」

「さてな。とにかく元に戻る」

どう戻るかはあえて言わないタレーランだった。そうしてだった。彼はフランスに戻りだ。また動くことになった。そして再び夜会に赴くことになるのだった。

2
0
1
1
•
6
•
2
4

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1407y/>

夜会

2011年11月2日01時09分発行